

## 地震痕跡

『地震考古学』という研究分野があります。発掘調査で明らかにした地震痕跡を調べ、古文献資料を合わせて地震の発生時期とその大きさ、人々への影響などを考えるものです。考古資料には過去の災害をそのまま残す遺構もあります。

断層・土石流・液状化現象という自然現象があります。断層は地震動によって大きな力がかかり、岩盤などに縦あるいは横方向に地割れ・地形に段差が生じる現象です。京丹後市通り3号墳の埋葬施設では大きな埋葬施設に縦横のずれがあることがわかりました。土石流は大雨により地盤がゆるみ、地表面の土が一気に流れだす現象で、宮津市難波野遺跡、舞鶴市浦入遺跡でその痕跡が見つかっています。液状化現象は、地表からあまり深くないところにある水分を多く含んだ砂層や礫層が地震動によって圧縮されると、その反動で表層の土を割って水分と砂礫が噴き出す現象で、八幡市木津川河床遺跡などで確認されています。

断層・噴砂がどの時代に起こったかは、被害を受けた遺構の年代



地割れでずれた埋葬施設（通り3号墳）

と、その上層にある被害を受けていない遺構や遺物を含んだ層の年代を検討することで推定できます。液状化現象や噴砂の跡がたくさん見つかった木津川河床遺跡では、弥生時代から中世までの遺構が引き裂かれていました。また、噴砂のほかに液状化によって地面が幅数m、高さ1m程

度盛り上がる曲隆という現象の跡も見つかっています。これらの地震痕跡を覆って堆積している地層から江戸時代の遺物が出土していることから、これらの地震の痕跡は室町時代から江戸時代までに起きた地震によるものと考えられます。液状化現象は震度5以上の地震で起こることから相当大きな地震であったと想定できます。

京都府南部では木津川河床遺跡のほか、久御山町<sup>さやま</sup>佐山遺跡、同町市田<sup>いちださいとうぼう</sup>齊当坊遺跡、八幡市内里八丁<sup>うちさとのはちちょう</sup>遺跡、同市門田<sup>かどた</sup>遺跡などの各遺跡で地震痕跡が見つかっています。

文献資料によると文禄5（1596）年閏7月、M 8.0クラスの大地震が京阪神地域を襲い、各地が甚大な被害に見舞われました。特に伏見での被害が甚大であったため「伏見地震」と呼ばれています。この地震で、時の権力者豊臣秀吉が隠居屋敷として伏見に造ったばかりの指月<sup>しげつ</sup>伏見城の天守閣が崩れ落ち、新たに木幡山に伏見城を築いたことが文献に記されています。

木津川河床遺跡などの地震痕跡は、この「伏見地震」に関わる地震の痕跡であることがわかりました。（松尾史子）



木津川河床遺跡の噴砂



曲隆で床面が凸凹になった竪穴式住居跡（市田齊当坊遺跡）